

ビザンティン聖堂装飾における「三位一体」と「キリスト三態」

ウビシ修道院（グルジア）の装飾プログラムを中心に

益田 朋幸（早稲田大学文学学術院）

グルジア西部にあるウビシ Ubisi 修道院は、9 世紀前半に建立されたヴォールト天井をもつ単身廊式の聖堂建築を有する。内部のフレスコにはダミアネなる画家の署名が残されている。ダミアネによるフレスコは様式的に、マケドニアのミハイルとエウティキオスの作に類似しており、14 世紀前半に位置づけられよう。ダミアネは 14 世紀前半のビザンティン帝国に旅をして、当地の画風を学んでグルジアに帰ったものと思われる。

ヴォールト天井の頂部には、3 つのメダイオン・イメージが配される。東から「日の老いたる者としてのキリスト」（白髪白髯のキリスト）、「パントクラトールのキリスト」（黒髪黒髯のキリスト）、「天国の扉」（聖霊の発出する場）である。南北の身廊壁には 2 段のフリーズ状にキリスト伝の諸場面が並ぶ。さらにその下部には、修道院のタイトル聖人である聖ゲオルギオスの生涯のサイクルが描かれる。

複雑な壁面構成をもつギリシア十字式聖堂であれば、キリスト伝の配列順序は一見してわかりにくい。ウビシのような単身廊ヴォールト天井の建築の場合、時系列にキリストの生涯を描くことは比較的容易であったはずである。しかし実際の時系列はしばしば入れ替わり、混乱しているようにも思われる。無秩序に見えるキリスト伝の配列は、天井頂部に並ぶ 3 メダイオンを「三位一体」として、これを軸に聖堂全体の装飾プログラムを構成すべく、画家が意図的に行ったものであることを論じたい。

ウビシの図像の類例としては、カストリア（北ギリシア）聖ステファノス聖堂天井の装飾が挙げられる。カストリアではヴォールト天井に東から「パントクラトールのキリスト」、「日の老いたる者としてのキリスト」、「インマヌエルのキリスト」（幼児キリスト）の「キリスト三態」が配されている。キリストを年齢風貌の異なる 3 つの相の下に描く「キリスト三態」は、黙示録（1：8 他）において繰返し用いられる「今おられ、かつておられ、やがて来られる方」との神に対する呼称にインスピレーションを得たものであることが推測されるが、ビザンティン聖堂装飾にこれと同じ「キリスト三態」は現存せず、図像の淵源は確定できない。後期ビザンティンやポスト・ビザンティンの作例から判断するに、「キリスト三態」はビザンティン図像学に定着することなく、「インマヌエルのキリスト」が「空の御座」（聖霊の表象）に置き換えられることによって、「三位一体」として普及したものであろう。ウビシの図像もその文脈で捉えることが可能であるが、「三位一体」という教義的な図像にキリスト伝サイクルを組込むことによって、複雑なキリスト論を展開することに成功している。発表ではウビシのプログラムを中心に、キリストのメダイオン・イメージを軸にすえる中期、後期ビザンティンの聖堂装飾法の諸問題を考える。